

て之を攻め軍長をたてて之を攻め恐ろしき蝗のてどくち馬をすくめて國々の民をわづめて之を攻め、
 アラの王等どのの方伯等どのの督率等よびこのすべての領地の人をわづめて之を攻めよ、地ハ震ひ
 揺かんがハエホバの意旨をバビロン本亦しバビロンの地をして住む人なき荒地とならまめたまへど、
 りバビロンの勇者の戰をやめて其城にてもりこの力失て婦のてどくにからん其宅ハ燒けりこの門ハ折
 れん、駟ハ趨て駟わわい使者ハ趨て使者わわいバビロンの王わづめて邑ハ盡く取られ、渡日ハ取られ、沼
 へ横れ兵卒ハ怖るといせん、萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふバビロンの女ハ采場のてどし
 の踏るゝ時きたれり暫くわりのこの知るゝ時いたらん、バビロンの王チガダササル我を食ひ我を
 滅じ我を空き器のてどくち龍のてどくちに我を呑みわが珍饈をもて其腹を充じ我を逐出せり、
 住る者いはんわがうけし虐過と我肉ハバビロンにかゝるべしエホバの爲に我ハ血ハガハラに住る者
 をかゝるべしと、されどエホバかくいひたまふ、視よわれ汝の訟を理し汝の爲に仇を復さん、我が海を瀆
 かし其泉を乾すべし、バビロンハ饑饉とあり山ハの巢窟となり、詭異とあり人なき所とあらん、
 彼らハ獅子のてどくち共に吼え小獅子のてどくちに吼ゆ、彼らの怨の燃る時わわれ錠を設てかれらを醉せ、
 らを夢て喜むしめあがき寝にいらして目を醒すとあからしめ、たどエホバのいひたまふ、われ屠る美羊のて
 どく又牡羊と牡山羊のてどくにかれらるゝならしめん、セシヤクわかあきて取れしや、各地の人の頌美
 者いかにして執へらまじや、國々の中ハバビロンにかにして、詭異とありしや、海ハバビロンを溢れかゝり、
 の多れ波濤これに覆ふ、この諸邑ハ荒て燥ける地とあり、沙漠とあり、住む人なき地とあらん、このてど
 過るてどあらし、われバビロンをバビロンに罰じ、この香たる者を口より取出さん、國々ハわた川、の如くハ彼ら

七 耶利一〇一
八 耶利一〇二
九 耶利一〇三
一〇 耶利一〇四
一一 耶利一〇五
一二 耶利一〇六
一三 耶利一〇七
一四 耶利一〇八
一五 耶利一〇九
一六 耶利一〇一〇
一七 耶利一〇一一
一八 耶利一〇一二
一九 耶利一〇一三
二〇 耶利一〇一四
二一 耶利一〇一五
二二 耶利一〇一六
二三 耶利一〇一七
二四 耶利一〇一八
二五 耶利一〇一九
二六 耶利一〇二〇
二七 耶利一〇二一
二八 耶利一〇二二
二九 耶利一〇二三
三〇 耶利一〇二四
三一 耶利一〇二五
三二 耶利一〇二六
三三 耶利一〇二七
三四 耶利一〇二八
三五 耶利一〇二九
三六 耶利一〇三〇
三七 耶利一〇三一
三八 耶利一〇三二
三九 耶利一〇三三
四〇 耶利一〇三四
四一 耶利一〇三五
四二 耶利一〇三六
四三 耶利一〇三七
四四 耶利一〇三八
四五 耶利一〇三九
四六 耶利一〇四〇
四七 耶利一〇四一
四八 耶利一〇四二
四九 耶利一〇四三
五〇 耶利一〇四四
五一 耶利一〇四五
五二 耶利一〇四六
五三 耶利一〇四七
五四 耶利一〇四八
五五 耶利一〇四九
五六 耶利一〇五〇
五七 耶利一〇五一
五八 耶利一〇五二
五九 耶利一〇五三
六〇 耶利一〇五四
六一 耶利一〇五五
六二 耶利一〇五六
六三 耶利一〇五七
六四 耶利一〇五八
六五 耶利一〇五九
六六 耶利一〇六〇
六七 耶利一〇六一
六八 耶利一〇六二
六九 耶利一〇六三
七〇 耶利一〇六四
七一 耶利一〇六五
七二 耶利一〇六六
七三 耶利一〇六七
七四 耶利一〇六八
七五 耶利一〇六九
七六 耶利一〇七〇
七七 耶利一〇七一
七八 耶利一〇七二
七九 耶利一〇七三
八〇 耶利一〇七四
八一 耶利一〇七五
八二 耶利一〇七六
八三 耶利一〇七七
八四 耶利一〇七八
八五 耶利一〇七九
八六 耶利一〇八〇
八七 耶利一〇八一
八八 耶利一〇八二
八九 耶利一〇八三
九〇 耶利一〇八四
九一 耶利一〇八五
九二 耶利一〇八六
九三 耶利一〇八七
九四 耶利一〇八八
九五 耶利一〇八九
九六 耶利一〇九〇
九七 耶利一〇九一
九八 耶利一〇九二
九九 耶利一〇九三
一〇〇 耶利一〇九四

來らばバビロンの石垣踞れん、我民よ汝らの中よりいで各エホバの烈しき怒をまぬかれ、この命を
 救へ、汝ら心を弱くする勿れ、此地わてきく所の浮言によりて畏るゝ勿れ、浮言ハ此年も來り、次の年も亦き
 たらん、此地に強暴あり、宰者と宰者どわひ攻るてどわらん、故わ視よ我バビロンの偶像を罰する日來らん
 の者ハバビロンの事、け爲ハ敬び、敬はん、この敗壞者北の方より、此地に來ればなり、エホバこれをいひたまふ
 巴ビロンのイサエルの殺さるゝ者、踏せし如く、全地の殺さるゝ者、バビロンに踏るべし、劍を逃るゝ
 者よ、往け止る勿れ、遠方よりエホバを憶え、エルサレムを汝らの心に置くべし、黒書をきくによりて我ら羞
 て異邦人エホバの室の聖處本いるより、我らの面ハ羞恥盈つ、この故わエホバのいひたまふ、禮よわ
 の偶像を罰する日いたらん、傷けられたる者ハこの全國に呻吟べし、○たど巴ビロンの天ハ昇るとも、其
 城を高くして堅むるとも、敗壞者我よりいで、彼らわひたらんと、エホバのいひたまふ、巴ビロンハ號咷の聲
 あり、カルデア人の地ハ大なる敗壞あり、エホババビロンをば、方ぼ、其中大なる聲を絶したまふ、其波濤
 ハ巨水のてどく、小鳴り、この聲ハ響わたる、破滅者これハ臨み、巴ビロンわい、た、其勇士ハ執へられ、其弓ハ
 折らるゝ、エホバハ施報をなす、神よ、されど、なす報いたまふなり、われらの牧伯等と博士等と督率等と勇士
 とを醉せん、彼らハ永き寝にいらして目を醒すと、あらし萬軍のエホバと名ぐる王、これをいひたまふ、萬軍
 王エホバかくいひたまふ、巴ビロンの鬮、石垣ハ悉く毀たれり、この高き門ハ火よ、燃れん、斯民の勞苦ハ徒ど、
 るべし、民ハ火のために、憐れん、○これハアラセヤの子、アラセヤガエ、この王セシヤと、どもに
 其治世の四年に、バビロンに往くと、きにわたりて、預言者エリミヤのこれに、命せし言なり、このセラヤハ、侍從

七 耶利一〇一
八 耶利一〇二
九 耶利一〇三
一〇 耶利一〇四
一一 耶利一〇五
一二 耶利一〇六
一三 耶利一〇七
一四 耶利一〇八
一五 耶利一〇九
一六 耶利一〇一〇
一七 耶利一〇一一
一八 耶利一〇一二
一九 耶利一〇一三
二〇 耶利一〇一四
二一 耶利一〇一五
二二 耶利一〇一六
二三 耶利一〇一七
二四 耶利一〇一八
二五 耶利一〇一九
二六 耶利一〇二〇
二七 耶利一〇二一
二八 耶利一〇二二
二九 耶利一〇二三
三〇 耶利一〇二四
三一 耶利一〇二五
三二 耶利一〇二六
三三 耶利一〇二七
三四 耶利一〇二八
三五 耶利一〇二九
三六 耶利一〇三〇
三七 耶利一〇三一
三八 耶利一〇三二
三九 耶利一〇三三
四〇 耶利一〇三四
四一 耶利一〇三五
四二 耶利一〇三六
四三 耶利一〇三七
四四 耶利一〇三八
四五 耶利一〇三九
四六 耶利一〇四〇
四七 耶利一〇四一
四八 耶利一〇四二
四九 耶利一〇四三
五〇 耶利一〇四四
五一 耶利一〇四五
五二 耶利一〇四六
五三 耶利一〇四七
五四 耶利一〇四八
五五 耶利一〇四九
五六 耶利一〇五〇
五七 耶利一〇五一
五八 耶利一〇五二
五九 耶利一〇五三
六〇 耶利一〇五四
六一 耶利一〇五五
六二 耶利一〇五六
六三 耶利一〇五七
六四 耶利一〇五八
六五 耶利一〇五九
六六 耶利一〇六〇
六七 耶利一〇六一
六八 耶利一〇六二
六九 耶利一〇六三
七〇 耶利一〇六四
七一 耶利一〇六五
七二 耶利一〇六六
七三 耶利一〇六七
七四 耶利一〇六八
七五 耶利一〇六九
七六 耶利一〇七〇
七七 耶利一〇七一
七八 耶利一〇七二
七九 耶利一〇七三
八〇 耶利一〇七四
八一 耶利一〇七五
八二 耶利一〇七六
八三 耶利一〇七七
八四 耶利一〇七八
八五 耶利一〇七九
八六 耶利一〇八〇
八七 耶利一〇八一
八八 耶利一〇八二
八九 耶利一〇八三
九〇 耶利一〇八四
九一 耶利一〇八五
九二 耶利一〇八六
九三 耶利一〇八七
九四 耶利一〇八八
九五 耶利一〇八九
九六 耶利一〇九〇
九七 耶利一〇九一
九八 耶利一〇九二
九九 耶利一〇九三
一〇〇 耶利一〇九四

其治世の四年に、バビロンに往くと、きにわたりて、預言者エリミヤのこれに、命せし言なり、このセラヤハ、侍從
 るべし、民ハ火のために、憐れん、○これハアラセヤの子、アラセヤガエ、この王セシヤと、どもに
 其治世の四年に、バビロンに往くと、きにわたりて、預言者エリミヤのこれに、命せし言なり、このセラヤハ、侍從

七 耶利一〇一
八 耶利一〇二
九 耶利一〇三
一〇 耶利一〇四
一一 耶利一〇五
一二 耶利一〇六
一三 耶利一〇七
一四 耶利一〇八
一五 耶利一〇九
一六 耶利一〇一〇
一七 耶利一〇一一
一八 耶利一〇一二
一九 耶利一〇一三
二〇 耶利一〇一四
二一 耶利一〇一五
二二 耶利一〇一六
二三 耶利一〇一七
二四 耶利一〇一八
二五 耶利一〇一九
二六 耶利一〇二〇
二七 耶利一〇二一
二八 耶利一〇二二
二九 耶利一〇二三
三〇 耶利一〇二四
三一 耶利一〇二五
三二 耶利一〇二六
三三 耶利一〇二七
三四 耶利一〇二八
三五 耶利一〇二九
三六 耶利一〇三〇
三七 耶利一〇三一
三八 耶利一〇三二
三九 耶利一〇三三
四〇 耶利一〇三四
四一 耶利一〇三五
四二 耶利一〇三六
四三 耶利一〇三七
四四 耶利一〇三八
四五 耶利一〇三九
四六 耶利一〇四〇
四七 耶利一〇四一
四八 耶利一〇四二
四九 耶利一〇四三
五〇 耶利一〇四四
五一 耶利一〇四五
五二 耶利一〇四六
五三 耶利一〇四七
五四 耶利一〇四八
五五 耶利一〇四九
五六 耶利一〇五〇
五七 耶利一〇五一
五八 耶利一〇五二
五九 耶利一〇五三
六〇 耶利一〇五四
六一 耶利一〇五五
六二 耶利一〇五六
六三 耶利一〇五七
六四 耶利一〇五八
六五 耶利一〇五九
六六 耶利一〇六〇
六七 耶利一〇六一
六八 耶利一〇六二
六九 耶利一〇六三
七〇 耶利一〇六四
七一 耶利一〇六五
七二 耶利一〇六六
七三 耶利一〇六七
七四 耶利一〇六八
七五 耶利一〇六九
七六 耶利一〇七〇
七七 耶利一〇七一
七八 耶利一〇七二
七九 耶利一〇七三
八〇 耶利一〇七四
八一 耶利一〇七五
八二 耶利一〇七六
八三 耶利一〇七七
八四 耶利一〇七八
八五 耶利一〇七九
八六 耶利一〇八〇
八七 耶利一〇八一
八八 耶利一〇八二
八九 耶利一〇八三
九〇 耶利一〇八四
九一 耶利一〇八五
九二 耶利一〇八六
九三 耶利一〇八七
九四 耶利一〇八八
九五 耶利一〇八九
九六 耶利一〇九〇
九七 耶利一〇九一
九八 耶利一〇九二
九九 耶利一〇九三
一〇〇 耶利一〇九四

の長かり エレミヤハバロンのにすまたとす諸の災ひを書にまらせり是則ちバロンの事につきて録せる此すべての言なり エレミヤセラヤにひけり汝バロンに往しとき慎ての諸の言を讀め而して汝いふべしエホバよ汝りこの處を滅し人を畜をいはず凡て此處に住む者なからしめて解かくてこれを荒地とあさなん此處にむかひてひいたまへり汝この書を讀畢りしとき之に石をむすびつけてエフラヤの中に投ひれよ而していふべしバロンハ我れこれに災をくだすによりて是をづみて復たせらざるべし彼らハ絶てたんと此までハエレミヤの言あり

第六十五章 一 セテキヤハ位に即しとき二十一歳なりしがエルサレムに於て十一年世をかざりたり

の母の名ハハマルどひてリヅナのエレミヤの女あり 二 セテキヤハエホヤキヤガ凡てなしたる如くエホバの目の前に惡をさせり 三 すあえちエホバハエルサレムとユダとを怒りて之をのり前より棄てばあちた

まふ是に於てセテキヤハバロンの王に叛けり 四 セテキヤの世の九年十月十日にバロンの王チツカヅチ

サルラの軍勢をひきあてエルサレムに攻めきたり之に向ひて陣をさし四周に成櫓を建て之を攻めたり 五

かくこの邑攻圍されてセテキヤハ王の十一年にまでおよびしが 六 一の四月九日にいたりて城邑のうち饑る

てど甚たしくかり其地の民食物をえざりき 七 是をもて城邑つひに打破られたれば兵卒ハ皆逃て夜の中に

王の圍の邊なる二箇の石垣の間の門より城邑をぬけいで平地の途に循ひてあちゆけり時ニカルデア人の

城邑を圍みたる 八 妙にカルデア人の軍勢王を追ひゆきユリコの平地にてセテキヤに還付けるにりの軍勢

みな彼を驅れて散りしかば 九 カルデア人王を執へて之をハラの地ハハラにをるバロンの王ハ所ふ

屯きゆきけれと王彼の罪をさだめたり 十 バロンの王すあえちセテキヤの子等をろけ目ハ前に殺さしめ

五 耶利米三章九節至十

一 中九

二 耶利米一五〇九

三 耶利米一五〇九

四 耶利米一五〇九

五 耶利米一五〇九

六 耶利米一五〇九

七 耶利米一五〇九

八 耶利米一五〇九

九 耶利米一五〇九

十 耶利米一五〇九

十一 耶利米一五〇九

十二 耶利米一五〇九

十三 耶利米一五〇九

十四 耶利米一五〇九

十五 耶利米一五〇九

十六 耶利米一五〇九

十七 耶利米一五〇九

十八 耶利米一五〇九

十九 耶利米一五〇九

二十 耶利米一五〇九

二十一 耶利米一五〇九

二十二 耶利米一五〇九

二十三 耶利米一五〇九

二十四 耶利米一五〇九

二十五 耶利米一五〇九

二十六 耶利米一五〇九

二十七 耶利米一五〇九

二十八 耶利米一五〇九

二十九 耶利米一五〇九

三十 耶利米一五〇九

三十一 耶利米一五〇九

三十二 耶利米一五〇九

三十三 耶利米一五〇九

三十四 耶利米一五〇九

三十五 耶利米一五〇九

三十六 耶利米一五〇九

三十七 耶利米一五〇九

三十八 耶利米一五〇九

三十九 耶利米一五〇九

四十 耶利米一五〇九

四十一 耶利米一五〇九

四十二 耶利米一五〇九

四十三 耶利米一五〇九

四十四 耶利米一五〇九

四十五 耶利米一五〇九

四十六 耶利米一五〇九

四十七 耶利米一五〇九

四十八 耶利米一五〇九

四十九 耶利米一五〇九

五十 耶利米一五〇九

五十一 耶利米一五〇九

五十二 耶利米一五〇九

五十三 耶利米一五〇九

五十四 耶利米一五〇九

五十五 耶利米一五〇九

五十六 耶利米一五〇九

五十七 耶利米一五〇九

五十八 耶利米一五〇九

五十九 耶利米一五〇九

六十 耶利米一五〇九

六十一 耶利米一五〇九

六十二 耶利米一五〇九

六十三 耶利米一五〇九

六十四 耶利米一五〇九

六十五 耶利米一五〇九

六十六 耶利米一五〇九

六十七 耶利米一五〇九

六十八 耶利米一五〇九

六十九 耶利米一五〇九

七十 耶利米一五〇九

七十一 耶利米一五〇九

七十二 耶利米一五〇九

七十三 耶利米一五〇九

七十四 耶利米一五〇九

七十五 耶利米一五〇九

七十六 耶利米一五〇九

七十七 耶利米一五〇九

七十八 耶利米一五〇九

七十九 耶利米一五〇九

八十 耶利米一五〇九

八十一 耶利米一五〇九

八十二 耶利米一五〇九

八十三 耶利米一五〇九

八十四 耶利米一五〇九

八十五 耶利米一五〇九

八十六 耶利米一五〇九

八十七 耶利米一五〇九

八十八 耶利米一五〇九

八十九 耶利米一五〇九

九十 耶利米一五〇九

九十一 耶利米一五〇九

九十二 耶利米一五〇九

九十三 耶利米一五〇九

九十四 耶利米一五〇九

九十五 耶利米一五〇九

九十六 耶利米一五〇九

九十七 耶利米一五〇九

九十八 耶利米一五〇九

九十九 耶利米一五〇九

一百 耶利米一五〇九

ユダは收伯等を悉くリヅナを殺さしめ またセテキヤの目を抉さしめたり斯てバロンの王かれを銅索

小繫きてバロンハ携へゆさうの死る日まで枷を置り 二 バロンの王チツカヅチの世十九年正月

月十日バロンの王ハ前つかふる侍衛の長チツカヅチエルサレムを去り 三 エホバの室と王ハ室を

燒き火をもてエルサレムのすべての室と大なる諸の室を燒り また侍衛の長と僕ありしがカルデア人の

軍勢エルサレムの四周の石垣を悉く毀てり 四 侍衛の長チツカヅチあち民れうち貧乏者城邑の中

に餘れる者よびバロンの王ハ降りし人との餘れる者を搬移せり 五 但し侍衛の長チツカヅチの

地れあ貧乏者を遣して葡萄を耕る者とかも農夫とあせり 六 カルデア人またエホバの室ハ銅の柱と洗滌の

臺と銅の海を碎きての銅を悉くバロンに運び 七 また鉛と火鏝と燧剪と鉄と匙をかよびすべて用うる

ところの銅器を取り 侍衛の長もまた洗滌と火盤と鉢と鉛と燧臺と匙と等なぞ凡て金銀かて作れる者

を取り またリヅナモツ王がエホバの室お造りし所の二の柱と一の海と臺の下ある十二の銅の牛を取れり

このもろくの銅の重ハ稱る可らず 二 この柱ハ高さ十八キユビトあり又紐をもてこの周圍を測るに十二

キユビどあり指四本の厚ハして突あり 三 この上ハ銅の頂ありこの頂の高ハ五キユビトの周圍ハ銅の

網子と石榴にて飾れり他の柱とこの石榴も之ハわかきと 四 の四方ハ九十六の石榴あり網子の上なるすべ

ての石榴の數ハ百あり 五 侍衛の長ハ祭司の長セラヤと第二の祭司セバニヤと三人の門守を執へ 六 また兵

卒を督る一人の寺人と王の前にはばるものころハ城邑にて遇じとこの者七人どうの地の民を募る軍勢

の長なる書記と城邑の中にて遇じとこの六十人の者を邑よりとらへざれり 七 侍衛の長チツカヅチ

れら執へてリヅナに居るバロンの王の許にいたれり 八 バロンの王ハラの地のリヅナにこれを取

ち鞭せりかくユダの地の地よりどらへ移されたり、^{三六}チガテザルがどらへ移せし民の左のごとし
 第七年にユダ人三千二百三十八、またチガテザルがの十八年にエルサレムより八百三十二人をどらへ
 移せり、^三チガテザルがの二十三年に侍衛の長チガテザルがユダ人七百四十五人をどらへ移したり其總
 ての數ハ四千六百八なりき、^三ユダの王エホヤキムがどらへ移されたる後三十七年十二月二十五日バビ
 ロンに王エヒルメダクらの治世の一年にユダの王エホヤキムを縛よりひだしてその首をわけしめ、^三善
 言をもて彼を慰めし、バビロンに偕に居るとこの王等、バビロンに其縛の衣服を脱いで、^三
 じエホヤキムハ一生の間つねに王の前に食せり、^三かれ其死る日まで一生の間つねに日々の分をバビロ
 の王よりたませりて其食物となせり

ノ平廿二
 ノ平廿四
 ノ平廿五
 ノ平廿六
 ノ平廿七
 ノ平廿八
 ノ平廿九
 ノ平三十

ノ平三十一
 ノ平三十二
 ノ平三十三
 ノ平三十四
 ノ平三十五
 ノ平三十六
 ノ平三十七
 ノ平三十八
 ノ平三十九
 ノ平四十

ノ平四十一
 ノ平四十二
 ノ平四十三
 ノ平四十四
 ノ平四十五
 ノ平四十六
 ノ平四十七
 ノ平四十八
 ノ平四十九
 ノ平五十

耶利米亞記終

耶利米亞哀歌

わよ哀しいかな吉吉と人のみちみたりし此都邑いまい凄しき様にて坐し寡婦のごとくに
 なれり、^一嗚もろくの民の中にて大いかりし者もろくの州の中に女王たりし者いまいかへつて眞をい
 る者となりぬ、^二彼よもすがら痛く泣きかかみみて涙面にあがる、その戀人の中にこれを感じる者い
 どりだに無く、その朋にこれ背きてその仇となれり、^三ユダの艱難の故によりまた大いなる苦役のゆゑ
 によりて擲されゆき、もろくの國に住ひて安處を得ず、これを追ふのみ不狹隘にてこれに退じきぬ、^四
 シオンの道路ハ節會に上り來る者なきがために哀しみ、その門にことごとく荒き、その祭司ハ歡き、その
 處女ハ憂ひ、^五シオンもまた自から苦しむ、その仇ハ首となり、その敵ハ亭ゆ、その愆の多きによりてエホ
 バこれをなやませたまへるなり、そのわかき子等ハ擲されて仇の前にゆけり、^六シオンの女よりの樂
 華とどくく離れされり、またその牧伯等ハ草を得ざる鹿のごとくに成り、そのれを退ふもの前にかつ
 かれて歩みゆけり、^七エルサレムハその艱難と窘迫の時むかしの代にありしもの、^八の樂しき物を思ひ出
 づ、その民仇の手にあちり、誰もこれを助くるものなき時仇人これを見てその荒てたるを笑ふ、^九ユル
 サレムはなはだしく罪を深かしたれば汚穢たる者のごとくなれり、前にこれを尊ぶびたる者もその穢
 體を見しによりて皆これをいやしむ、是もまたみづから唾き、身をうむけて退きけり、^{一〇}その汚穢之れハ帯
 になり、彼の終局をふもとざりき、^{一一}此故に驚ろくまでに零落たり、一人の慰さむる者だに無し、エホバよ
 わが艱難をかへりみたまへ、敵ハ勝勝こそり、敵すてに手を伸てその財寶をことごとく奪ひたり、^{一二}汝さき
 に異邦人等ハ人々の公會に在るべからずと命じおきたまひしに彼らが聖所に侵入しるをシオンに見た

ノ平四十七
 ノ平四十八
 ノ平四十九
 ノ平五十
 ノ平五十一
 ノ平五十二
 ノ平五十三
 ノ平五十四
 ノ平五十五
 ノ平五十六
 ノ平五十七
 ノ平五十八
 ノ平五十九
 ノ平六十

ノ平六十一
 ノ平六十二
 ノ平六十三
 ノ平六十四
 ノ平六十五
 ノ平六十六
 ノ平六十七
 ノ平六十八
 ノ平六十九
 ノ平七十
 ノ平七十一
 ノ平七十二
 ノ平七十三
 ノ平七十四
 ノ平七十五
 ノ平七十六
 ノ平七十七
 ノ平七十八
 ノ平七十九
 ノ平八十

ノ平八十一
 ノ平八十二
 ノ平八十三
 ノ平八十四
 ノ平八十五
 ノ平八十六
 ノ平八十七
 ノ平八十八
 ノ平八十九
 ノ平九十
 ノ平九十一
 ノ平九十二
 ノ平九十三
 ノ平九十四
 ノ平九十五
 ノ平九十六
 ノ平九十七
 ノ平九十八
 ノ平九十九
 ノ平百

ノ平百一
 ノ平百二
 ノ平百三
 ノ平百四
 ノ平百五
 ノ平百六
 ノ平百七
 ノ平百八
 ノ平百九
 ノ平百十
 ノ平百十一
 ノ平百十二
 ノ平百十三
 ノ平百十四
 ノ平百十五
 ノ平百十六
 ノ平百十七
 ノ平百十八
 ノ平百十九
 ノ平百二十

ノ平百二十一
 ノ平百二十二
 ノ平百二十三
 ノ平百二十四
 ノ平百二十五
 ノ平百二十六
 ノ平百二十七
 ノ平百二十八
 ノ平百二十九
 ノ平百三十
 ノ平百三十一
 ノ平百三十二
 ノ平百三十三
 ノ平百三十四
 ノ平百三十五
 ノ平百三十六
 ノ平百三十七
 ノ平百三十八
 ノ平百三十九
 ノ平百四十

ノ平百四十一
 ノ平百四十二
 ノ平百四十三
 ノ平百四十四
 ノ平百四十五
 ノ平百四十六
 ノ平百四十七
 ノ平百四十八
 ノ平百四十九
 ノ平百五十
 ノ平百五十一
 ノ平百五十二
 ノ平百五十三
 ノ平百五十四
 ノ平百五十五
 ノ平百五十六
 ノ平百五十七
 ノ平百五十八
 ノ平百五十九
 ノ平百六十

十一 人の民みな衰きて食物をもどめ、その生命を支へんがために財寶を出して食にかへたり、エホバよ
 見ろなほし我のいやしめらるるを願ひかたまへ、すべて行路人よ、ななぢら何ともおもてざるか、エホバよ
 考へ見よ、エホバよ、上より火をくだし、わが骨にいれて之を克服せしめ、綱を張りわが足をどらへて我を
 後にもかまぬ、我をして終日心さびしく、かつ疾わづらえまめたるよ、わが徳光の輝く御手にて結ぶ
 れ諸の徳を以て、わが頂にのれり、是らわが力を盡して、主わが敵たり、わが敵たり、わが敵たり、わが敵たり、
 わたしたまへり、主われの中なる勇士をこどく、除き、節をもよふして我を攻め、わが少き人を打ば
 らばしたまへり、主酒權をふむがごとくに、エホバの處女をふみたまへり、これがために我なげく、わが目や
 わが目には水あがる、わがたせしひを活すべき、癒さむるものわれに遠ければなり、わが子等、敵の勝るに
 よりて滅びうせに、エホバの手をのぶれども、誰もこれを感じざる者なし、ヤコブにつきては、エホバの命
 をくだしてその周圍の民をこれ敵と思ひたまへ、エホバの敵と思はれたる者、エホバの敵と思はれたる者、
 多くなりぬ、エホバの正し、我の命令にうむきたるなり、一切の民よ、われに聽け、わが憂苦をかへり、
 よ、わが處女もわが少き男も、倅四つて往り、われわが戀人を呼ばれども、彼らわれを欺けり、わが祭司、およ
 びわが長老、老い生命を毀さんとして、食物を求むる間に都邑の中に氣息たえたり、エホバよ、かへりみたまへ、
 我のなやみてをり、わが勝れきかへり、わが心も、わが裏に顛倒す、われ甚だしく、憐れたり、外に、剣
 わりてわが子を殺し、内に、死のとき者あり、かれらわが、嗟歎をさけり、我をなやむむるもの一人だ
 に無し、わが敵み、わが難難をささ、および、汝のこれを爲たまひしを喜べり、汝にさきに告げせし

十一節 九百九十二
 十二節 九百九十三
 十三節 九百九十四
 十四節 九百九十五
 十五節 九百九十六
 十六節 九百九十七
 十七節 九百九十八
 十八節 九百九十九
 十九節 一千
 二十節 一千零一
 二十一節 一千零二
 二十二節 一千零三
 二十三節 一千零四
 二十四節 一千零五
 二十五節 一千零六
 二十六節 一千零七
 二十七節 一千零八
 二十八節 一千零九
 二十九節 一千一十
 三十節 耶利米哀歌

たまへ、わが嘆嘆も多く、わが心うられひかなしむなり
 三十一 かく、エホバの靈怒をわけて、無雲をもてエホバの女を蔽ひたまひ、イサエルの榮光を天より地
 におとし、その靈怒の日に、巴の足跡を心に定めたまはざりき、主ヤコブのすべての住居を吞つて、わ
 はれます、靈怒によりて、エホバの女の保壁を毀ち、これを地にたふし、その國、その國、その國、その國、
 しき靈怒をもて、イサエルのすべての角を絶ち、敵の前にて、右の手をひきちり、四面を焚きつくす
 燃る火のごとく、ヤコブを焚き、敵のごとく、弓を張り、仇のごとく、右の手を挺て、立ち見て、目に置くごとしき
 ものを滅ぼし、エホバの幕屋に火のごとく、その怒をうききたまへり、主敵のごとく、に成たまひて、
 エホバを吞ぼらばし、その諸の殿を吞ぼらばし、そのの保壁をこぼち、エホバの女の上に憂愁を
 悲哀を増くと、エホバの幕屋を荒し、その集會の所をほろぼしたまへり、エホバの節、節、節、節、
 エホバに忘れしめ、烈しき怒によりて、王と祭司とをいやしめ、棄たまへり、主の祭壇を忌棄て、その聖
 所を嫌ひ憎みて、その諸の殿の石垣を敵の手にわたしたまへり、彼ら、その集會の日のごとく、エホバの室にて
 聲をたつ、エホバ、エホバの女の石垣を毀たんと、思ひたため、綱を張り、こぼさ進みて、その手をひかず、壕
 と石垣とを去て、哀しきまめたる、是ら共に憂う、その門の地に埋もれ、エホバの關木をこぼさく、
 き、その王も、そのの教、律法、法、法、そのの預言者、エホバより、異象を蒙らば、エホバの
 の女の長老等、八地に坐りて、蹶し、首に麻をかむり、身に麻をまき、エホバの處女、首を地に低る

三十一節 一千零三
 三十二節 一千零四
 三十三節 一千零五
 三十四節 一千零六
 三十五節 一千零七
 三十六節 一千零八
 三十七節 一千零九
 三十八節 一千一十
 三十九節 一千一十一
 四十節 一千一十二
 四十一節 一千一十三
 四十二節 一千一十四
 四十三節 一千一十五
 四十四節 一千一十六
 四十五節 一千一十七
 四十六節 一千一十八
 四十七節 一千一十九
 四十八節 一千二十
 四十九節 一千二十一
 五十節 耶利米哀歌

一 耶六〇七 哀三〇六
二 耶六〇八 哀三〇七
三 耶六〇九 哀三〇八
四 耶六一〇 哀三〇九
五 耶六一一 哀三一〇
六 耶六一二 哀三一〇
七 耶六一三 哀三一〇
八 耶六一四 哀三一〇
九 耶六一五 哀三一〇
十 耶六一六 哀三一〇
十一 耶六一七 哀三一〇
十二 耶六一八 哀三一〇
十三 耶六一九 哀三一〇
十四 耶六二〇 哀三一〇
十五 耶六二一 哀三一〇
十六 耶六二二 哀三一〇
十七 耶六二三 哀三一〇
十八 耶六二四 哀三一〇
十九 耶六二五 哀三一〇
二十 耶六二六 哀三一〇

わが目涙のために潰れんとし、わが腸に沸かへり、わが肝に地に塗る、わが民の女は、幼少ものや哺乳兒に疲れて、邑の街衢に氣慮たへかんとすれば、かれらに疵疾負る者のごとく邑のちまたにて氣慮たへなんとし、母の懷にのこるの靈魂をさへ、母にむかひて言ふ、穀物と酒とをいづくか、わがやど、エルサレムの女よ、我亦にをもて汝わがかし、何をもて汝わがらばんや、エルサレムの處女よ、われ何をもて汝にからへて汝をなぐさめんや、汝のやぶれ海のごとく、夫亦う啞たれか能く、なんぢを覆さるや、なんぢの預言者、虚しき事と愚かることと、なんぢに預言し、かつて汝の不義をあらせして、この囚をまぬかれ、めめん、とせざりき、その預言するところ、惟むあしき重荷、および退放たる、根本となるべき事のみ、すべて往來の、人、なんぢにむかひて手を拍り、エルサレムの女にむかひて、嘲りわらひ、かつ頭をふりて言ふ、美麗の極、全地の欣喜や、と入たり、と邑に是なるか、と、なんぢの敵、なんぢの口に對ひて口を開け、わざり笑ひて、切齒をなす、斯て言ふ、われら之を吞つくしたり、是われらが望みたかりし日なり、われら已に之にわたり、我らずでに之を見たり、と、エルサレムの定めたまへること、成し、いにしへより其命、たたまひし言を果したまへり、エルサレムは、乃ばして隣れまなす、敵をして汝わがらは、しめ、汝の仇の角をたかくしたまへり、かれらの心、主をむかひて呼ばれり、エルサレムの女の壇垣よ、なんぢの初更に起いで、呼さけ、主の御前に、汝の心を水のごとく灌げ、街衢のはどりに、饑たふるよ、なんぢの夜、の初更に起いで、呼さけ、主の御前に、汝の心を水のごとく灌げ、街衢のはどりに、饑たふるよ、なんぢの幼兒の生命のために、主にむかひて、兩手をあげよ、エルサレムよ、視たまへ、汝、これを誰にあて、なむしか、願て、願ひたまへ、婦人おの、質なるもの、懷き育て、と、後兒を食ふべけんや、祭司、預言者、等、主の聖所において

一 耶六二七 哀三一〇
二 耶六二八 哀三一〇
三 耶六二九 哀三一〇
四 耶六三〇 哀三一〇
五 耶六三一 哀三一〇
六 耶六三二 哀三一〇
七 耶六三三 哀三一〇
八 耶六三四 哀三一〇
九 耶六三五 哀三一〇
十 耶六三六 哀三一〇
十一 耶六三七 哀三一〇
十二 耶六三八 哀三一〇
十三 耶六三九 哀三一〇
十四 耶六四〇 哀三一〇
十五 耶六四一 哀三一〇
十六 耶六四二 哀三一〇
十七 耶六四三 哀三一〇
十八 耶六四四 哀三一〇
十九 耶六四五 哀三一〇
二十 耶六四六 哀三一〇

殺さるべけんや、をさなきも、老たるも、街衢にて地に臥し、わが處女も、若き男も、丹にかゝりて斃れたり、なんぢの節會の日のごとく、わが懼るごころの者、を四方より呼わつめたまへり、エルサレムの靈怒の日、に運れたる者、なく、又のこりたる者、なかりき、わが懷き育て、し者、みなわが敵のために、はづはれたり、我、わが、靈祭の筈によりて、艱難を遭たる人なり、かき、我をひきて、黑暗をあゆませ、光明にゆかしめたまへ、まこと、に、屋々、の、手を、わけて、終日、われを、攻め、やまし、わが、肉と、肌膚、を、おどるへ、ま、わが、骨を、推さ、われに、むかひて、患苦と、艱難を、築きて、これを、もて、我を、圍み、われを、して、長久に、死し、者の、ごとく、暗き處に住し、我を、かこみ、て、出ること、能と、きらしめ、わが、鎖索を、重くしたまへり、我、さげ、びて、助をも、とめ、し、と、き、彼、わが、祈禱を、ふせぎ、我、た、る、石を、もて、わが、道、を、塞ぎ、わが、途を、せげ、たまへり、この、我、に、對する、こと、に、伏て、伺、が、ふ、熊のごとく、酒、み、か、く、る、と、獅子のごとく、われに、膝を、離して、め、我を、ひき、さき、て、獨り、る、し、ま、め、弓を、張、て、われを、矢、先、の、的、と、な、し、矢、筒の、矢を、もて、わが、腰を、射、ぬ、きた、まへり、わ、さ、り、わが、すべての、民、の、わ、ざ、り、と、な、り、終、日、う、た、ひ、う、ら、ら、し、ら、る、か、き、我を、して、苦、き、物に、飽、し、め、齒、肉を、飲、ま、め、小石を、もて、わが、齒を、推、き、灰を、もて、我を、築、ひ、た、ま、へり、なん、ぢ、わが、靈魂を、と、て、平和を、遠く、と、さ、き、ま、め、た、ま、へ、わ、我、の、福、を、わ、す、れ、た、り、是、に、お、い、て、我、み、づ、から、言、り、わが、氣、力、う、せ、ゆ、き、ぬ、エル、サ、レ、ム、よ、り、何、を、も、望、む、べ、き、と、無、し、じ、ぬ、が、は、く、り、我、が、艱、難と、苦、楚、齒、肉、と、膽、汁、と、を、心、に、配、た、ま、へ、わ、が、た、ま、し、の、今、亦、は、是、ら、の、事、を、想、ひ、て、わ、が、哀、に、戀、く、わ、れ、て、の、事、を、心、に、お、も、ひ、起、せ、り、この、故、に、望、を、い、だ、く、さ、り、わ、れ、ら、の、倚、ほ、る、び、ぎ、る、ら、い、エル、サ、レ、ム、の、仁、愛、に、よ、り、の、憐、憫の、盡、さ、る、に、因、る、これ、も、朝、ご、に、新、き、り、か、ん、ぢ、の、誠、實、の、

一 耶六四七 哀三一〇
二 耶六四八 哀三一〇
三 耶六四九 哀三一〇
四 耶六五〇 哀三一〇
五 耶六五一 哀三一〇
六 耶六五二 哀三一〇
七 耶六五三 哀三一〇
八 耶六五四 哀三一〇
九 耶六五五 哀三一〇
十 耶六五六 哀三一〇
十一 耶六五七 哀三一〇
十二 耶六五八 哀三一〇
十三 耶六五九 哀三一〇
十四 耶六六〇 哀三一〇
十五 耶六六一 哀三一〇
十六 耶六六二 哀三一〇
十七 耶六六三 哀三一〇
十八 耶六六四 哀三一〇
十九 耶六六五 哀三一〇
二十 耶六六六 哀三一〇

鳥はいかなるかな わが靈魂の言ふ、エホバのわが分なり、このゆゑに我を待ち望まぬ エホバのこれ
 を待ち望む者とかのれを尋ねもどむる人に愚恵をばどこしたまふ エホバの救援をのぞみて静にこまを
 待之喜し 人わが空に鞭を負ひ善し エホバのこれを負せたまふなきを獨坐して黙すべし 口を塵につ
 げよ、あるひと望むらん かのれを擧つ者に煙をひけ、充足るまでには恥辱をうけよ、主は永久に乘る
 ことを爲たまはざるべけれなり かれ之患難を興へたまふといへど、その慈悲おほいなるべきた憐愍
 を加へたまふなり 心より世の人をなやまし、かつ苦しめたまふに、いかにさるあり 世のものゝの俘
 囚を脚の下にふみにしり 至高者の面前にて人の理を枉げ、人の詞訟を屈むること、主のよるこび
 たまはざるどころなり 主は命じたまふに、わが誰か事を述ん、この事すなはち成んや、福も福も
 どもに至高者の口より出るに、あらずや、活る人、かなん怨言べけんや、人か、このれの罪の罰せらるゝを、つづ
 やくべけんや、我備みづから、行をまらば、かつ省みて、エホバに歸るべし、われら、天に、います神に、むか
 ひて、手と、どもに、心をも、擧べし、われら、罪を、かき、我ら、罪を、かき、我ら、罪を、かき、我ら、罪を、かき、
 かなんち、震怒を、もて、みづから、蔽ひ、我ら、を、退、汝、め、殺して、わ、れ、を、殺、す、雲を、もて、みづから、蔽ひ、祈禱を、して、
 通せざらぬ、もろゝ、民の中に、われら、を、塵埃と、かしたまへり、敵、わ、れ、ら、に、むかひて、口を、張り、
 恐懼と、陷陣、を、た、暴行と、滅亡、に、來せり、わが、民の、女の、滅亡、によりて、わが、眼に、涙の、河なる、わが、目
 と、斷ず、涙を、うり、ぎて、止す、天より、エホバの、臨み、見、て、顧み、たまふ、時、に、ま、で、至ら、ん、わが、邑の、一切の、女、等、の
 故、によりて、わが、眼、わが、心、を、いた、まし、む、故、く、く、として、我に、敵、する、者、ども、鳥を、遣、ど、く、に、いた、く、我を、お、ひ
 わが、生命を、坑の中に、は、る、ぼし、わが、上、に、石を、投、げ、ま、れ、水、わが、頭、の、上、に、流、る、我、み、み、か、ら、言、ひ、滅、び、ら

一 詩六〇、七、三三、三
 二 詩六〇、五、七、九、一〇、一
 三 詩六〇、七、九、一〇、一
 四 詩六〇、七、九、一〇、一
 五 詩六〇、七、九、一〇、一
 六 詩六〇、七、九、一〇、一
 七 詩六〇、七、九、一〇、一
 八 詩六〇、七、九、一〇、一
 九 詩六〇、七、九、一〇、一
 一〇 詩六〇、七、九、一〇、一
 一一 詩六〇、七、九、一〇、一
 一二 詩六〇、七、九、一〇、一
 一三 詩六〇、七、九、一〇、一
 一四 詩六〇、七、九、一〇、一
 一五 詩六〇、七、九、一〇、一
 一六 詩六〇、七、九、一〇、一
 一七 詩六〇、七、九、一〇、一
 一八 詩六〇、七、九、一〇、一
 一九 詩六〇、七、九、一〇、一
 二〇 詩六〇、七、九、一〇、一
 二一 詩六〇、七、九、一〇、一
 二二 詩六〇、七、九、一〇、一
 二三 詩六〇、七、九、一〇、一
 二四 詩六〇、七、九、一〇、一
 二五 詩六〇、七、九、一〇、一
 二六 詩六〇、七、九、一〇、一
 二七 詩六〇、七、九、一〇、一
 二八 詩六〇、七、九、一〇、一
 二九 詩六〇、七、九、一〇、一
 三〇 詩六〇、七、九、一〇、一
 三一 詩六〇、七、九、一〇、一
 三二 詩六〇、七、九、一〇、一
 三三 詩六〇、七、九、一〇、一
 三四 詩六〇、七、九、一〇、一
 三五 詩六〇、七、九、一〇、一
 三六 詩六〇、七、九、一〇、一
 三七 詩六〇、七、九、一〇、一
 三八 詩六〇、七、九、一〇、一
 三九 詩六〇、七、九、一〇、一
 四〇 詩六〇、七、九、一〇、一
 四一 詩六〇、七、九、一〇、一
 四二 詩六〇、七、九、一〇、一
 四三 詩六〇、七、九、一〇、一
 四四 詩六〇、七、九、一〇、一
 四五 詩六〇、七、九、一〇、一
 四六 詩六〇、七、九、一〇、一
 四七 詩六〇、七、九、一〇、一
 四八 詩六〇、七、九、一〇、一
 四九 詩六〇、七、九、一〇、一
 五〇 詩六〇、七、九、一〇、一
 五一 詩六〇、七、九、一〇、一
 五二 詩六〇、七、九、一〇、一
 五三 詩六〇、七、九、一〇、一
 五四 詩六〇、七、九、一〇、一
 五五 詩六〇、七、九、一〇、一
 五六 詩六〇、七、九、一〇、一
 五七 詩六〇、七、九、一〇、一
 五八 詩六〇、七、九、一〇、一
 五九 詩六〇、七、九、一〇、一
 六〇 詩六〇、七、九、一〇、一
 六一 詩六〇、七、九、一〇、一
 六二 詩六〇、七、九、一〇、一
 六三 詩六〇、七、九、一〇、一
 六四 詩六〇、七、九、一〇、一
 六五 詩六〇、七、九、一〇、一
 六六 詩六〇、七、九、一〇、一
 六七 詩六〇、七、九、一〇、一
 六八 詩六〇、七、九、一〇、一
 六九 詩六〇、七、九、一〇、一
 七〇 詩六〇、七、九、一〇、一
 七一 詩六〇、七、九、一〇、一
 七二 詩六〇、七、九、一〇、一
 七三 詩六〇、七、九、一〇、一
 七四 詩六〇、七、九、一〇、一
 七五 詩六〇、七、九、一〇、一
 七六 詩六〇、七、九、一〇、一
 七七 詩六〇、七、九、一〇、一
 七八 詩六〇、七、九、一〇、一
 七九 詩六〇、七、九、一〇、一
 八〇 詩六〇、七、九、一〇、一
 八一 詩六〇、七、九、一〇、一
 八二 詩六〇、七、九、一〇、一
 八三 詩六〇、七、九、一〇、一
 八四 詩六〇、七、九、一〇、一
 八五 詩六〇、七、九、一〇、一
 八六 詩六〇、七、九、一〇、一
 八七 詩六〇、七、九、一〇、一
 八八 詩六〇、七、九、一〇、一
 八九 詩六〇、七、九、一〇、一
 九〇 詩六〇、七、九、一〇、一
 九一 詩六〇、七、九、一〇、一
 九二 詩六〇、七、九、一〇、一
 九三 詩六〇、七、九、一〇、一
 九四 詩六〇、七、九、一〇、一
 九五 詩六〇、七、九、一〇、一
 九六 詩六〇、七、九、一〇、一
 九七 詩六〇、七、九、一〇、一
 九八 詩六〇、七、九、一〇、一
 九九 詩六〇、七、九、一〇、一
 一〇〇 詩六〇、七、九、一〇、一

せぬと エホバよ、われ深き坑の底より、汝の名を呼り、なんぢ、我の、聲を、聴たまへり、わが、哀歎と、祈、來、に、耳
 を、お、ひ、た、ま、ふ、な、か、れ、わが、汝を、飼、たり、し、時、か、ん、ち、ら、に、近、よ、り、た、ま、ひ、て、恐、る、く、か、れ、と、宣、へり、主よ、か
 んち、わが、靈魂の、訴を、助、け、伸、べ、わが、生命を、贖、ひ、たまへり、エホバよ、なんち、わが、心、を、お、ひ、た、ま、ふ、不、義を
 見たまへり、願、せ、く、我に、正、し、き、審判を、與、たまへ、か、ん、ち、わが、我を、怨、み、わが、我を、害、せ、ん、と、か、る、を
 凡て、見たまへり、エホバよ、なんち、わが、我を、害、し、り、我を、害、せ、ん、と、か、る、を、凡て、聞、たまへり、か、の、立
 て、我に、逆、ら、ぶ、者、等、の、言、語、お、よ、び、の、終、日、わが、我を、攻、へ、ん、と、て、逆、ら、す、謀、計、も、ま、た、汝、これ、を、聞、たまへり、ね、が、ど
 く、の、彼、ら、の、起、居、を、か、ん、ち、み、たまへ、我、わ、れ、ら、に、歌、ひ、し、ら、る、エホバよ、なんち、わが、手、に、爲、す、と、て
 うに、俯、ひ、て、報、を、な、し、か、れ、ら、を、し、て、心、く、ら、か、ら、ま、め、た、ま、え、ん、なん、ち、の、呪、詛、か、さ、ら、に、歸、せ、よ、なん、ち
 の、靈、怒、を、も、て、か、れ、ら、を、追、ひ、エホバの、天の、下、よ、り、か、れ、ら、を、滅、ろ、ぼ、し、絶、た、ま、は、ん
第四章 わが黄金の光をうしなひ、純金の色を變じ、聖所の石もろろの、衛衛の口に投すてられたり
 二 わが黄金にも比ふべき、シオン、の、愛、子、等、の、陶、器、師、の、手、の、作、な、る、土、の、黒、い、の、と、ど、く、に、見、做、る、山、犬、さ、へ、も、乳
 房を、た、れ、て、ろ、の、子、に、乳を、哺、す、然、る、わ、が、民の、女、の、殘、忍、荒、野の、蛇、鳥の、と、ど、く、か、れ、り、乳、哺、兒の、舌、に、濁、さ
 三 上、階、に、た、ど、貼、き、幼、兒、ハ、バ、ン、を、も、ど、む、も、擧、て、あ、た、ふ、る、者、さ、し、肥、甘、物、を、く、ら、ひ、居、し、者、ら、か、ち、あ、れ
 四 衛衛に、わ、り、紅、の、衣、履、に、て、育、て、ら、れ、し、者、も、今、ハ、塵、埃、を、抱、く、い、ま、我、民の、女、の、う、く、る、怨、の、罰、之、シ、ム、ハ、の
 五 罪の、罰、よ、り、も、お、ほ、い、な、り、シ、ム、ハ、の、古、昔、人、に、手、を、加、へ、ら、る、く、と、ど、か、く、し、て、瞬、く、間、に、は、る、ぼ、され、し、な、り
 六 わが民の中なる、貴き人、從前、に、ハ、雪、よ、り、も、皎、潔、に、ハ、乳、よ、り、も、白、く、珊、瑚、よ、り、も、赤、紅、色、に、し、て、ろ、の、形、貌、の、う
 七 る、は、し、き、と、藍、玉、の、と、ど、く、な、り、し、が、い、ま、ハ、ろ、の、面、く、ろ、き、が、上、に、黒、く、衛、衛、に、あ、る、と、も、人、に、さ、ら、れ、ま、す、ろ、
 八 詩六〇、七、九、一〇、一
 九 詩六〇、七、九、一〇、一
 一〇 詩六〇、七、九、一〇、一
 一一 詩六〇、七、九、一〇、一
 一二 詩六〇、七、九、一〇、一
 一三 詩六〇、七、九、一〇、一
 一四 詩六〇、七、九、一〇、一
 一五 詩六〇、七、九、一〇、一
 一六 詩六〇、七、九、一〇、一
 一七 詩六〇、七、九、一〇、一
 一八 詩六〇、七、九、一〇、一
 一九 詩六〇、七、九、一〇、一
 二〇 詩六〇、七、九、一〇、一
 二一 詩六〇、七、九、一〇、一
 二二 詩六〇、七、九、一〇、一
 二三 詩六〇、七、九、一〇、一
 二四 詩六〇、七、九、一〇、一
 二五 詩六〇、七、九、一〇、一
 二六 詩六〇、七、九、一〇、一
 二七 詩六〇、七、九、一〇、一
 二八 詩六〇、七、九、一〇、一
 二九 詩六〇、七、九、一〇、一
 三〇 詩六〇、七、九、一〇、一
 三一 詩六〇、七、九、一〇、一
 三二 詩六〇、七、九、一〇、一
 三三 詩六〇、七、九、一〇、一
 三四 詩六〇、七、九、一〇、一
 三五 詩六〇、七、九、一〇、一
 三六 詩六〇、七、九、一〇、一
 三七 詩六〇、七、九、一〇、一
 三八 詩六〇、七、九、一〇、一
 三九 詩六〇、七、九、一〇、一
 四〇 詩六〇、七、九、一〇、一
 四一 詩六〇、七、九、一〇、一
 四二 詩六〇、七、九、一〇、一
 四三 詩六〇、七、九、一〇、一
 四四 詩六〇、七、九、一〇、一
 四五 詩六〇、七、九、一〇、一
 四六 詩六〇、七、九、一〇、一
 四七 詩六〇、七、九、一〇、一
 四八 詩六〇、七、九、一〇、一
 四九 詩六〇、七、九、一〇、一
 五〇 詩六〇、七、九、一〇、一
 五一 詩六〇、七、九、一〇、一
 五二 詩六〇、七、九、一〇、一
 五三 詩六〇、七、九、一〇、一
 五四 詩六〇、七、九、一〇、一
 五五 詩六〇、七、九、一〇、一
 五六 詩六〇、七、九、一〇、一
 五七 詩六〇、七、九、一〇、一
 五八 詩六〇、七、九、一〇、一
 五九 詩六〇、七、九、一〇、一
 六〇 詩六〇、七、九、一〇、一
 六一 詩六〇、七、九、一〇、一
 六二 詩六〇、七、九、一〇、一
 六三 詩六〇、七、九、一〇、一
 六四 詩六〇、七、九、一〇、一
 六五 詩六〇、七、九、一〇、一
 六六 詩六〇、七、九、一〇、一
 六七 詩六〇、七、九、一〇、一
 六八 詩六〇、七、九、一〇、一
 六九 詩六〇、七、九、一〇、一
 七〇 詩六〇、七、九、一〇、一
 七一 詩六〇、七、九、一〇、一
 七二 詩六〇、七、九、一〇、一
 七三 詩六〇、七、九、一〇、一
 七四 詩六〇、七、九、一〇、一
 七五 詩六〇、七、九、一〇、一
 七六 詩六〇、七、九、一〇、一
 七七 詩六〇、七、九、一〇、一
 七八 詩六〇、七、九、一〇、一
 七九 詩六〇、七、九、一〇、一
 八〇 詩六〇、七、九、一〇、一
 八一 詩六〇、七、九、一〇、一
 八二 詩六〇、七、九、一〇、一
 八三 詩六〇、七、九、一〇、一
 八四 詩六〇、七、九、一〇、一
 八五 詩六〇、七、九、一〇、一
 八六 詩六〇、七、九、一〇、一
 八七 詩六〇、七、九、一〇、一
 八八 詩六〇、七、九、一〇、一
 八九 詩六〇、七、九、一〇、一
 九〇 詩六〇、七、九、一〇、一
 九一 詩六〇、七、九、一〇、一
 九二 詩六〇、七、九、一〇、一
 九三 詩六〇、七、九、一〇、一
 九四 詩六〇、七、九、一〇、一
 九五 詩六〇、七、九、一〇、一
 九六 詩六〇、七、九、一〇、一
 九七 詩六〇、七、九、一〇、一
 九八 詩六〇、七、九、一〇、一
 九九 詩六〇、七、九、一〇、一
 一〇〇 詩六〇、七、九、一〇、一